

デカルトにおける実践的道德

久保田 進一

はじめに

『哲学原理』の序文には、デカルトの学問大系が一本の木⁽¹⁾に喩えられている。その枝として医学と機械学と道徳が三つの主要な学問として挙げられている⁽²⁾。その中でも道徳に関しては、次のように述べられている。「ここにいう道徳は、最も高い最も完全な道徳であって、他の諸学の全き知識を前提し、知恵の最後の段階であります」⁽³⁾と。

デカルトは道徳を「知恵の最後の段階」と位置づけているように、それはデカルト自身が晩年に取りかかろうとした課題でもあったと言えよう。しかし、デカルトはスウェーデンに招かれ、そこで、突然亡くなってしまうのである。デカルト自身、予期しないことであっただろう。そのため、デカルトが晩年、取りかかろうとした道徳の問題は完成することとはなかった。

また、デカルトが道徳について多くを語らなかった理由として、彼の友人でもありフランス公使であるシャニュに、二つの理由を書簡の中で述べている。「第一は、悪意ある人間にとって、人を中傷する口実をこれ以上容易に引き出すことのできる問題はないこと、第二は、他人の道徳生活を規定することに関与する権利は、君主または君主からそれを許されている人々にしかないと信じることです」⁽⁴⁾と。このことによって、デカルトは道徳については多くを語らなかったことが理解されよう。

しかし、デカルトが道徳についてどのように考えていたのかは、おおよそわかるだろう。というのも、デカルトはまとまった道徳に関する著作を書いてはいないが、それぞれの著作や書簡の中で、しばしば道徳について触れているからである。そこで、本稿においては、『方法序説』における「暫定的道徳」を端緒にして、デカルトの道徳について考えていこうと思う。そして、それに続くものとして、エリザベトとの書簡を取

り上げる。そのなかでも、特に、セネカの『幸福な生について』を取り上げている箇所注目していこうと思う。また、本来なら、『情念論』においては、道徳についてもっと踏み込んだ議論をする必要があるが、本稿は「暫定的道徳」を端緒に考察するため、それに関連した箇所として第48項と第170項を取り上げるのに留めようと思う。(もちろん、この箇所以外の場所にも「暫定的道徳」に関わる箇所は多々見られる。)

デカルトの道徳観が全体的にどのようなものであったのかという所までは、とても本稿では扱いきれない問題である。しかし、「暫定的道徳」を端緒にして、デカルトの道徳が実践的であるかどうか生活に結びついたものであるかどうかということは言えるだろう。

まず、『方法序説』における「暫定的道徳」とは何であるのか、見てみよう。

1. 『方法序説』における暫定的道徳

デカルトは『方法序説』の「第三部」で三つの格率とそこから導きだされる結論が示されている。いわゆる暫定的道徳(仮の道徳)と言われるものである。それは以下のものである。第一の格率から順々に見ていこう。

1.1 第一の格率

「第一の格率は、私の国の法律と習慣とに服従し、神の恩寵により幼児から教えこまれた宗教をしっかりともちつづけ、ほかのすべてのことでは、私が共に生きてゆかねばならぬ人々のうちの最も分別ある人々が、普通に実生活においてとっているところの、最も穏健な、極端からは遠い意見に従って、自分を導く、ということであった。」⁽⁵⁾

この第一の格率を見ると、デカルトの実生活の態度がよくわかる。デカルトの穏健的で保守的な態度がよく表れている。デカルトは、学問に対しては、「もし私が学問においていつか堅固で揺るぎのないものをうちたてようと欲するなら、一生に一度は、すべてを根こそぎくつがえし、最初の土台から新たにはじめなくてはならない」⁽⁶⁾と言っておきながら、

実生活では自分の国の法律、習慣に服従し、幼児からの宗教をしっかりと持ち続けると言うのである。デカルトは実生活と真理探求を区別しなくてはならないことを主張する。これは、デカルトの一貫したテーマであると言えよう。決して、実践と認識が一貫していないということではなく、むしろ次元が異なるものを一つのものとして考えてしまうと、そこから混迷が生じてしまう。しかし、実践の場面と認識の場面を区別するのであれば、その混迷さを避けることができるのである。

1.2 第二の格率

「私が第二の格率は、私の行動において、できるかぎり、しっかりと、またきっぱりした態度をとることであり、いかに疑わしい意見にでも、いったんそれをとると決心した場合は、それがきわめて確実なものである場合と同様に、変わらぬ態度で、それに従いつづけること、であった。」⁽⁷⁾

第二の格率は、行動においては、疑わしい意見でも、一度決心した場合には、それを確実なもののみならず、従うということである。やはりここにも実践と認識の次元の区別が出ている。しかも、実践と認識とは、まったく違う方向性をむいているのも特徴的である。認識の場面においては、「ほんのわずかの疑いでもかけうるものは、それが偽であることを私が見きわめた場合とまったく同じように、ことごとくはらいのけることにしよう」⁽⁸⁾としている。しかし、実践の場面においては、「いかに疑わしい意見にでも、いったんそれをとると決心した場合は、それがきわめて確実なものである場合と同様に、変わらぬ態度で、それに従いつづけること」⁽⁹⁾としているのである。

デカルトはこの第二の格率の箇所、森に迷いこんでしまった旅人の例を挙げている。

「どこかの森に迷いこんだ旅人たちは、あちらへ向かったり、こちらへ向かったりして迷い歩くべきではなく、いわんやまた一つの場所にとどまっているべきでもなく、つねに同じ方向に、できるかぎりまっすぐに歩むべきであって」⁽¹⁰⁾としている。その理由は、「というのは、こうすることによって、旅人たちは彼らの望むちょうどその場所には行けなく

とも、少なくとも最後にはどこかにたどりつき、それはおそらく森のまん中よりはよい場所であろうからである」⁽¹¹⁾としている。

このことを、まさにわれわれの実生活に当てはめてみると、よく理解できるであろう。いろいろと迷うよりはたとえ結果的に間違っていたとしても、決断するときには、その限りでの最善のものを選ぶのであるから、一度決断したら、その方向にとにかく進んでみるのは、最良のことであろう。

また、認識の次元と実践の次元を区別する理由に次のことを挙げている。「実生活の行動はしばしば猶予をゆるさぬものであるから、より真なる意見を見分けることができない場合に、より蓋然的なるものをわれわれがとるべきであるという、このこと自身は、きわめて確実な真理なのである」⁽¹²⁾としている。デカルトは、実生活の場面においては、あれこれ迷う余裕はなく、すぐに決断をしなければならないことを重々に承知しているのである。

そして、ここにはデカルト哲学に特徴的な意志の働きが強調されている。一度決断したことには、意志を曲げずに、それに向かって実行することを主張するのである。このことに対して、友人のポロからの次のような批判がある。

「第一に、道徳の第二の規則（格率）は、危険であるように思われま
す。一度、従うと決定した意見がきわめて疑わしいものであるとき、それらがきわめて確実であるのと全く同様に、それらを保持するというのは、危険であるように思われます。というのも、もしそれらの意見が間違っていたり、誤っているものであるなら、人はそれらの意見に従えば従うほど、誤謬や悪徳に陥ってしまうでしょう。」⁽¹³⁾と批判している。

これに対して、デカルトは次のように述べている。

「第一に、一度、ある意見に従おうと決定したならば、その意見に疑わしい点があっても、絶対的に頼らなければならないと私が申したとすれば、頑として他の意見を受け入れてはならないと申したと同様に非難さるべきことでしょう。一つの意見にしがみついていることは、人がそ

れによって下した判断を後生大事に固執することに他ならないからです。しかし、私が言ったのは、これとは全く別のことなのです。すなわち、自分の判断が定まらない時でも、行為においては果断でなければならぬ一度これときめたならば、という意味は、これ以上良いあるいは確かな意見はないと考えた場合、それが如何に疑わしいものでも、その意見が最良のものであることを知っている場合と同様に、変わることなくそれを守り続けなければならない、言い換えれば、疑わしいと思うが故に実行がぐらついたりしてはならない、と申したのです。事実、その時の条件の下で、その意見が最良なのですから。そして、行為におけるこの決断が、次第に誤謬や悪徳に踏み込ませることを恐れる必要はありません。(中略) それ故に、決断が一つの美德である以上、決断をその反対の二つの悪徳、すなわち優柔不断と頑固との間に位置づけるためには、私のとった用心に勝る用心はとり得なかったと思っております。」⁽¹⁴⁾と述べている。

この書簡において、デカルトは「決断」を一つの美德としている。そして、一度決断したなら、それを変えることをしないことが、その人の精神の強さとなる。結局、この第二の格率でも、認識の次元と実践の次元の区別がなされ、実践においては、意志の力が要求され、一度決断したことを変えないということをデカルトは善しとしているのである。

1.3 第三の格率

「私の第三の格率は、つねに運命によりもむしろ自己にうちかつことにつとめ、世界の秩序よりはむしろ自分の欲望を変えようとつとめること、そして一般的にいって、われわれが完全に支配しうるものとしてはわれわれの思考しかなく、われわれの外なるものについては、最善の努力をつくしてなおなしとげえぬ事からはすべて、われわれにとっては、絶対的に不可能である、と信ずる習慣をつけること、であった。」⁽¹⁵⁾

第三の格率は、「つねに運命によりもむしろ自己にうちかつことにちうとめ、世界の秩序よりはむしろ自分の欲望を変えようとつとめること」⁽¹⁶⁾としている。非常に禁欲的であり、ストア的でもある。しかし、ストア哲学をデカルトは決して評価していない。それは、『方法序説』第一部に

において、次のように述べていることから窺うことができる。「私は道徳を扱った古代異教徒たちの著書を、砂と泥との上に建てられたにすぎぬ、きわめて豪華な壮麗な宮殿にたとえていた。彼らは徳を大いに賛美し、世のすべてのものより尊いものだと思わせる。しかし彼らは、いかにして徳を認識すべきかを、十分には教えてくれない。そして多くの場合、彼らが徳というりっぱな名でよんでいるものは、冷酷あるいは傲慢あるいは絶望あるいは親殺しにすぎないのである」⁽¹⁷⁾と言う。デカルトの道徳観がストアの影響を受けているのは確かであるとしても、一線を画すのも確かでもある。したがって、デカルトの生き方はストア的であると言えるが、その中身は全く異なるものである。

また、第二の格率と同様に、ここにもデカルトの実践に対して重要視していることが理解できよう。特に、意志の力について考えると、まさに、この第三の格率において、表れているのである。「運命よりも自己にうちかつこと」あるいは「世界の秩序よりはむしろ自分の欲望を変えよう」とつとめること」ということは、相当に意志の強さが要求される。さらに、このことから、非常に自己抑制的であることが言えるだろう。

1.4 暫定的道徳の結論

「最後に、このような道徳の結論として、私は人々がこの世でたずさわるさまざまな仕事をすべて吟味にかけ、そのなかから最もよいものを選びようとした。そして、他の人々については何もいうつもりはないが、私自身はいまたずさわっている仕事をつづけるのが最もよい、と考えた。それはみずからの全生涯をみずからの理性の開発に用い、みずから課した方法により、真理の認識においてできるかぎり前進する、ということである。」⁽¹⁸⁾

この最後の格率は、格率と呼べるものであろうか。このことは以前から問題になっていることである。むしろ、デカルト自身、述べているように、「道徳の結論」なのである。というのも、他の格率は一般的なこととして述べることができ、普遍化可能である。格率として、誰に対しても適応可能である。しかし、この最後の格率は、デカルト自身の個人的なことを述べているにすぎないのではないか。当然、すべての人に当てはめることは無理である。

しかし、これはデカルト個人のことであるが、一つの結論を導き出したことになる。しかも、上の三つの格率から導き出された結論である。したがって、この結論においては、普遍化は可能ではないとしても、デカルトの個人的な生き方として特殊化して導き出されたものである。デカルト自身も述べているように、「他の人々については何もいうつもりはない」としていることから、自分だけの生き方について述べたものなのである。少なくとも、このことを普遍化しようとするれば、「個々人において最もよいという仕事を選択せよ」ということになるだろう。そして、選択した以上は、「全生涯においてその仕事に打ち込め」ということを表明するつもりでいるのだらう。デカルトの場合は学問に身を捧げることになり、自分の全生涯を理性の開発と真理の認識に捧げるということになるのである。

そして、その結果として、次のようなことが導き出される。

「したがって、みずからの最善をなすには、いいかえれば、あらゆる徳を獲得するとともにわれわれの手に入れうるあらゆる他の善をも獲得するには、できるかぎりよく判断するだけでたりののであって、このことをわれわれが確信しうるかぎり、心の満足をけって欠くことはないであろう。」⁽¹⁹⁾

以上のことから分かるように、結局は「よく判断する」ということに尽きる。そして、「よく判断する」とは意志を正しく使うということになる。この点に関して、グイエは次のように言う。「判断することは、魂の一つの行為である。ところで、行為にかかわらない意志というものは存在しない。したがって、判断することは、意志の行為である」⁽²⁰⁾と言う。つまり、デカルトは、この暫定的道徳という段階から、道徳を「判断する」というまさに行為するという次元、言うなれば、実践の次元において扱っているのである⁽²¹⁾。そして、それは意志の問題へと関わってくるものなのである。デカルトは、道徳を理論として考えるのではなく、行為を通して、実践として考えていたと言うことだろう。

そして、この暫定的道徳からデカルトの道徳観を読み取ると、他人や国家や社会のことよりも、結局、私（自分）はどう生きるべきなのか、どう意志を用いて判断し行動すべきなのかという問いに対する答なので

ある⁽²²⁾。その答が格率として現れているのである。デカルトの道徳は自分の生き方を示すことから成立しているとも言えるだろう。

2. エリザベトとの書簡における道徳

デカルトはエリザベトと約六十通の書簡のやり取りをしている。それらの書簡においても道徳についての発言をしている箇所がいくつかある。そのなかでも、しばしば取り上げられるのが、セネカの『幸福な生について (De vita beata)』を手がかりに道徳について述べている箇所である⁽²³⁾。デカルトはエリザベトとの書簡において、セネカの書物を読むことから始めるのであるが、結局はデカルト自身の道徳を述べることになる。このことについて触れる前に、デカルトは『方法序説』の「暫定的道徳」に繋がる規則について、エリザベトへの書簡の中で述べている。それは、ちょうど、セネカの「幸福論」の議論に入る前に述べているので、まず、このことから見ていこう。

2.1 暫定的道徳からの新たな道徳規則

さて、デカルトは『方法序説』の「第三部」において、「暫定的道徳」について述べていた。これに繋がるのが、1645年8月4日のエリザベト宛ての書簡である。それは以下の箇所である。

「第一は生のあらゆる場面で、何をなすべきかあるいはなすべきではないかを知るために、常に自分の精神をできるだけよく使うことです」⁽²⁴⁾

「第二は、姿勢が勤めることを、情念や欲望に妨げられることなく遂行するという固く変わらぬ決心をもつことです」⁽²⁵⁾

「第三は、できるかぎり理性にしたがって自分を導きながら、自分の所有していない善はどれも全く自分の力の外にあるものと考え、こうしてそれを決して欲しがらないように習慣づけることです」⁽²⁶⁾

以上が、「暫定的道徳」から繋がってくる新たな道徳の規則である。「暫

定的道徳」と全く対応しているとは言えないが、主張するところは同じである。それは、理性をよく用いて、一度決めたことに関しては、変更しないという決心をもち、自分の欲望や情念を押さえ込むことである。同じ箇所、「徳とすべきだと思われるのはこの決心の固さです」⁽²⁷⁾と述べている。デカルト自身はこれらの新たな規則について何も言うてはいないが、ある意味、これらは「暫定的道徳」から「決定的道徳」となったと言えるかもしれない。

この生きるための指針を示すことによって、セネカの『幸福な生について』を用いて、人生を考えるのには有効だったのだろう。というのも、デカルトがセネカを取り上げたのは、「自然的理性(*la raison naturelle*)のみを導きとする哲学者」⁽²⁸⁾だったからである。これは、デカルトの立場と同じと言ってもいいだろう。デカルトはエリザベトにセネカを勧めるのであるが、デカルトはセネカの考えに満足せず、自分の道徳に対する考えを述べるのである⁽²⁹⁾。それが、幸福に関することである。次は、この点を見てみよう。

2.2 幸運と至福

セネカの『幸福な生について』の最初に次の文章がある。「すべての人は幸福に生きることを欲するが、幸福な生とは何かをはっきりさせようとすると曖昧になる」と。この点について、デカルトは次のように言う。

「しかし、「幸福に生きること」(*vivere beate*)とは何かを知る必要があります。フランス語では幸運に生きること(*vivre heureusement*)と言えますが、ただ幸運(*heur*)と至福(*béatitude*)との間には違いがあります。幸運はわれわれの外なるもの(力の及ばないもの)にしか依存しないので、自分で手に入れたのではない善に行き当たった人たちは、賢明というよりも幸運であるとみなされます。これに対して至福は、精神の完全な満足と内的な充足とに存するように思われます。最も運命に恵まれた人でも普通はそれをもちませんが、賢者は運命によらずそれを獲得するので、かくして「幸福に生きること」、つまり至福に生きるとは、完全に満足し充足した精神をもつことにほかなりません」⁽³⁰⁾と。

このようにして、デカルトは幸運と至福を区別する。幸運はわれわれ

の外なるものがたまたま偶然に行き当たったものである。それに対し、至福は運命ではなく、賢者が獲得するものとしている。そして、セネカの言う「幸福に生きること」とは、「完全に満足し充足した精神をもつこと」とするのである。さらに、デカルトは続けて言う。

「そのあとで、人生を幸福にするものとは何か、つまりこの最高の満足をわれわれに与えるものは何かを考察し、私はそれには二種類あることに注目しています。すなわち、徳や知恵のようにわれわれに依存するものと、名誉や富や健康のようにわれわれに依存しないものとです」⁽³¹⁾と。

この箇所は「暫定的道徳」の第三の格率に呼応している。確かに、われわれには二種類の満足を与える善がある。一方はわれわれの力で何とかなることであり、他方はわれわれの力が及ばないものである。われわれの力が及ばないものにいくら力を注いでも、最初から無力なのであり徒労に終わるだろう。しかし、われわれの力によって、なんとかなるものには力を注ぐことは無駄ではないだろう。そういう観点から人生の幸福について考えれば、誰もが「幸福に生きること」が可能になる。デカルトの次の言葉はそれを表している。

「しかしながら、小さな器は容量が少なくても、大きな器と同じほどいっぱい満たされることが出来るように、各人の満足ということ、理性によって規制された欲求の充足および達成の意味にとるならば、いかに貧しく、いかに運命や自然から愛されない人でも、よしんば多くの幸福を享受するのではないにせよ、他の人と同じく完全に満足し充足し得ることを、私は疑いません」⁽³²⁾と。

2.3 至福と最高善

それでは、至福と最高善の関係はどうなっているのであろうか。まずは、セネカの最高善についてのデカルトの評価を見てみよう。デカルトの評価は厳しいと言わざるを得ない。「そのすべての説明は、きわめて曖昧と思われます」⁽³³⁾あるいは「第四章と第五章では、彼は最高善について他のいくつかの定義をしています。それらはみんな第一章での意味と

何らかの関係がありますが、そのどれも最高善を十分に説明していません。その定義がまちまちであることは、セネカは自分が何を言いたいかを明晰に理解していなかったことを示しています⁽³⁴⁾というものである。

そこで、デカルトは自分の意見として、次のように言うのである。

「第一に気づかれることは、至福と、最高善と、われわれの行為が向かうべき究極目的ないし目標との間には相違があることです。というのは、至福は最高善ではなく、最高善を前提とするからです。至福は最高善を持つことから来る精神の満足ないし充足です」⁽³⁵⁾

このことから、至福と最高善の関係が明らかになっている。デカルトによれば、最高善とは「ただ善をなそうとする堅固な意志と、そこから生まれる満足にのみ存する」⁽³⁶⁾と考えていることから、最高善を持つことによって至福に至ることになる。そこにはやはり、意志が絡んでくるのである。デカルトのここでの書簡の結論は、次のようなものである。

「それゆえにここで、至福は精神の満足、つまり一般に満足においてのみある、と結論することができるように思います。というのは、身体に依存する満足や、全く身体に依存しない満足というものがあるにせよ、しかしどんな満足も精神のなかにしかないからです。しかし確固たる満足を持つためには、徳を実行することが必要です。つまり、われわれが最善と判断するすべてのことを遂行する固く不変の意志をもち、かつそれを正しく判断するよう知性の全力を用いることが必要です」⁽³⁷⁾と。

3. 『情念論』における決断と不決断

『情念論』がデカルトの道徳を理解する上では、重要なテキストである。しかし、このテキストは道徳論と読める部分もあるが、生理学的な記述から「情念の自然化」と読むこともできる。さて、道徳に関する部分については幾つかの項目が挙げられるが、ここでは、第48項の「精神の強さと弱さについて」の記述に注目したいと思う。というのも、先に見た『方法序説』の「暫定的道徳」の第二の格率に関係してくるからで

ある。第二の格率は行動においては、疑わしい意見でも、一度決心した場合には、それを確実なものとなして、従うということであった。まさに、このことは第 48 項に表れているのである。

「私が、意志それみずからの武器とよぶものは、意志がそれに従ってみずからの生の行動を導こうと決心しているところの、善と悪との認識についての、しっかりした決然たる判断、である。そして最も弱い精神とは、その意志がそのように一定の判断に従おうとは決心せず、たえずそのときそのときの情念によって動かされるままになるような精神である。」⁽³⁸⁾

強い精神とは、まさに「意志がそれに従ってみずからの生の行動を導こうと決心しているところの、善と悪との認識についての、しっかりした決然たる判断」ができるかどうかに関わっている。逆に、弱い精神とは、「一定の判断に従おうとは決心」できないことである。言うなれば、「決断」に対して、「不決断」ということである。「不決断については、」『情念論』の第 170 項で、次のように述べている。

「不決断」もまた一種の「懸念」であって、精神がなしうる多くの行為の間に、どっちつかずの状態に精神をおき、精神をしてどの行為も実行させないことになり、したがって、決心するまえに選択をするための時を精神がもつようにする。そして精神が選択に時をもつというこの点では、この情念は確かにある善い用途をもっているのである。けれども、この情念が必要以上に長くつづき、行為のために必要な時間を、思索のために費やさせるようなことになると、たいへん有害なのである。」⁽³⁹⁾と。

以上のように、結局は、行為の場面においての不決断は有害ということになると、ポロに宛てた書簡⁽⁴⁰⁾にも見られるように、悪徳の一つに数え上げることができるだろう。したがって、徳を最高善と考えるのなら、「不決断」ということは最高善ではありえなくなる。当然、「至福は最高善を持つことから来る精神の満足ないし充足」とすれば、「不決断」のままでは至福に至ることはないということになる。「よく判断」して行為を

実行することがデカルトにおいては至福の道なのである。

おわりに

以上のように、「暫定的道徳」を端緒として、エリザベトとの書簡と『情念論』のほんの一部を取り上げて、デカルトの道徳を考察してきた。これらを通じて言えることは、デカルトの道徳は非常に実践的であるということである。それは理性によって自己を如何にコントロールしていくかというものであり、その際、求められるのは堅固な意志である。この意志を持つことによって、至福にも至り、精神の満足を得ることができるのである。世界を変えるよりも自己の欲望を理性によって統御して、固い意志を持つことがデカルトの道徳の特徴と言えよう。これはデカルト自身の生活態度であり、生活指針であり、実践道徳に他ならないのである。本稿においては、デカルトの道徳を「暫定的道徳」を端緒にして、限定した形でしか取り上げなかったが、デカルト自身、全体として道徳をどのように理解していたのか、すなわち実践的な立場ではなく理論的な立場において道徳をどう考えていたのかがこれからの課題となろう。このことにより、デカルトの学問の全体系が一層明確になってくるのではないだろうか。

注

- (1) デカルトからの引用はすべてアダン・タヌリ版全集によるものとする。*Œuvres de Descartes, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, Paris. J.Vrin, 1996.* これをAT.と略記し、その巻と頁をそれぞれローマ数字、アラビア数字で示す。AT.IX-2.14
- (2) ここから、グイエは「哲学の木において、道徳は、医学、力学と同じ水準にある一つの応用科学である。したがって、道徳は知恵の一部である。」としている。H.Gouhier, *DESCARTES, essais*, J.Vrin, 1973, p.212. (中村雄二郎／原田佳彦訳『人間デカルト』白水社 187頁。) 道徳を応用科学として位置づけるということは、まさに実践に関わっている。
- (3) AT.IX-2.14

- (4) デカルトからシャニュ宛て書簡 1647年11月20日 AT.V.86-87
- (5) AT.VI.22-23
- (6) AT.VII.17
- (7) AT.VI.24
- (8) AT.VII.24
- (9) AT.VI.24
- (10) *ibid.*
- (11) AT.VI.24-25
- (12) AT.VI.25
- (13) デカルトからポロからデカルト宛て書簡 1638年2月 AT.I.512-513
- (14) デカルトからレネリ気付ポロ宛て書簡 1638年3月あるいは4月
AT.II.34-36
- (15) AT.VI.25
- (16) *ibid.*
- (17) AT.VI.7-8
- (18) AT.VI.27
- (19) AT.VI.28
- (20) H.Gouhier, *op.cit.* pp.217-218. (邦訳 前掲書 192頁。)
- (21) 桂寿一は、デカルトの道徳論を次のように捉えている。「生活と道徳とは決して二つではなく、道徳とは結局「よく生活する」(*bien vivre*) ことを教える以外には、あり得なかった」としている。桂寿一 『デカルト哲学とその発展』 東京大学出版会 1966年 140頁。
- (22) 野田又夫は「暫定的道徳(仮の道徳)」について、次のように述べている。「「仮の道徳」というのは学問的方法の裏打ちになるべき生活方法なのであります。」と。野田又夫 「デカルト—『方法序説』を中心に」所収『野田又夫著作集 1 デカルト研究』 白水社 1987年 301頁。
- (23) セネカの『幸福な生について』の話題が出てくるのは、デカルトからエリザベト宛ての書簡 1645年7月21日 AT.IV.251-253 (『デカルト=エリザベト往復書簡』 山田弘明訳 講談社学術文庫 2001年 93-95頁。) の書簡からである。その後、数ヶ月にわたって議論されている。
- (24) デカルトからエリザベト宛ての書簡 1645年8月4日 AT.IV.265 (邦訳 前掲書 98頁。)
- (25) *ibid.* (邦訳 前掲書 98頁。)

- (26) デカルトからエリザベト宛ての書簡 1645年8月4日 AT.IV.265-266 (邦訳 前掲書 98-99頁。)
- (27) デカルトからエリザベト宛ての書簡 1645年8月4日 AT.IV.265 (邦訳 前掲書 98頁。)
- (28) デカルトからエリザベト宛ての書簡 1645年8月4日 AT.IV.263 (邦訳 前掲書 96頁。)
- (29) デカルトが自分の考えを述べるようになったのは、エリザベトの次のような要望からも言える。「あなたが私に推薦された書を調べてみますに、たくさんのうわしい文章があり、うまく工夫された格言があることを知りました。それは私に快い思索の主題を与えてくれます。しかしそれは、著者が扱っている主題を私に教えることにはなりません。なぜならそこには方法がなく、著者は自らが提出した方法だけにしがっているのではないからです」エリザベトからデカルト宛ての書簡 1645年8月16日 AT.IV.268 (邦訳 前掲書 102頁。)と述べている。エリザベトはデカルトの考えでセネカの考えを正して欲しいと要望している。
- (30) デカルトからエリザベト宛ての書簡 1645年8月4日 AT.IV.263-264 (邦訳 前掲書 96-97頁。)
- (31) デカルトからエリザベト宛ての書簡 1645年8月4日 AT.IV.264 (邦訳 前掲書 97頁。)
- (32) デカルトからエリザベト宛ての書簡 1645年8月4日 AT.IV.264-265 (邦訳 前掲書 97頁。)
- (33) デカルトからエリザベト宛ての書簡 1645年8月18日 AT.IV.273 (邦訳 前掲書 108頁。)
- (34) デカルトからエリザベト宛ての書簡 1645年8月18日 AT.IV.274 (邦訳 前掲書 109頁。)
- (35) デカルトからエリザベト宛ての書簡 1645年8月18日 AT.IV.275 (邦訳 前掲書 110頁。)
- (36) デカルトから女王クリスティーナ宛ての書簡 1647年11月20日 AT.V.82
- (37) デカルトからエリザベト宛ての書簡 1645年8月18日 AT.IV.277 (邦訳 前掲書 112頁。)
- (38) AT. XI.367
- (39) AT. XI.459
- (40) デカルトからレネリ気付ポロ宛て書簡 1638年3月あるいは4月

AT.II.34-46